

### 3. エリック・フォナー 「労働者と奴隷制」

佐藤 円

フォナーの本論文は、1830年代から南北戦争にかけての労働者と奴隷<sup>アボリシ</sup>制<sup>ニズム</sup>廃止運動及び奴隷制拡大反対運動<sup>アンタイスレヴナリー・コウズ</sup>(<sup>1</sup>)の関係を扱っている。全体の構成は、フリーソイリズムの出現を境に大きく二つに分かれているが、最後に南北戦争が労働者にもたらした新たな状況について、短かいまとめが加えられている。以下三つの部分を順を追って要約し、その後若干のコメントを付したい。

#### 【要 約】

##### 1. 労働者と奴隷制廃止運動

アメリカにおける最初の労働運動は、1830年代という奴隷制が国家の政治生命の中心的問題となった時代に現われた。当時の労働者は、合衆国が公言した理想と南部における「独特の制度」つまり奴隷制との間に存在する矛盾に直面させられていた。

1830年代から40年代にかけて労働運動が発展した時、北部の労働者の奴隷制に対する態度は曖昧なものだった。他の北部人と同様に、彼らも奴隷制が独立宣言に表現されていた自由と平等の原理に対する侵害であると考えてはいたが、未熟な労働運動と奴隷制廃止論者との関係は、しばしば困難で緊張したものであった。

皮肉にも、北部の労働関係についての厳しい批判は、二つの非常に異なった運動において、つまり南部の奴隷制擁護論者と北部の労働運動の指導者のなかで同時に展開された。南部のジョージ・フィッツヒュー(George Fitzhugh)やジョン・C・カルフーン(John C. Calhoun)などの奴隷制擁護論者は、北部の自由な労働者の生活は南部の奴隷以下のものであると断言し、彼らの自由とは、自分の労働をその真の価値のひとかけらと交換に売るか、それとも飢えるかの選択にすぎず、彼らはまさに市場の奴隷であると主張した。一方、北部の労働運動の指導者も、労働者の生活が南部の奴隷よりもずっとましであるとは考えておらず、労働者のことを「賃金奴隷」という政治用語で表現していた。

もちろん「賃金奴隷」という用語は、通常北部と南部の労働者の状態に関する正確な比較を意味していなかった。しかし、独立した職人の伝統のなかで育った人々にとって、賃金のための労働は、自主性と自己の運命を支配する感覚の喪失を伴ったので、奴隷制の一形態のように思われた。

さらに労働者たちも、「賃金奴隷」という標語を持ち出していたので、南部の奴隷制の弊害に対して無関心ではなかった。しかし、多くの都市労働者は、もし奴隷が解放されれば、北部に流入してきて、職と身分を求めて労働者に挑戦するのではないかと心配していた。彼らの組合の多くが黒人を排除していたことから分かるように、彼らもアメリカの風土病である人種差別に冒されていたのである。

いずれにせよ「賃金奴隷」という言葉のなかには、奴隷制自体への非難が込められており、初期の労働運動における中心的な価値である自由、民主主義、個人の独立、労働の成果に対する労働者の権利は、奴隷制とは明らかに両立しなかった。加えて、労働運動の知的創始者であるトマス・ペイン(Thomas Paine)やロバート・D・オーウェン(Robert D. Owen)は、奴隷制反対論者としてよく知られていた。それゆえ北部の労働者が、奴隷制に反対する運動で、重要な役割を果たしたことは驚くにあたらない。

とは言うものの、労働運動と奴隷制廃止運動との関係が、必ずしも友好的であったわけではない。ウィリアム・ロイド・ギャリソン(William Lloyd Garrison)の『解放者』(Liberator)<sup>リベレーター</sup>紙の第一号には、北部の労働改革論者に対する攻撃が含まれている。

しかし、奴隷制廃止論者の側にも問題はあった。彼らの多くは資産家であったため、北部における労働関係を自然で公正なものであると受けとめていた。また、自由というものに対する認識にも、彼らと労働者の間には隔たりがあった。労働運動がアメリカ独立革命の共和主義的伝統に根をおろす理想を表明して、自由を自己の生産物に対する所有権と等置していたのに対し、奴隷制廃止運動は、自由を自己所有、つまり奴隷身分でないことと等置する新しい考え方を発展させていた。

## II. 労働者と奴隷制拡大反対運動

1840年代には、北部の労働者の状態に対する批判を強めていた少数の奴隷制廃止論者が、「生産階級」として奴隷と労働者は同じ立場にあると主張して、労働運

働の指導者と同盟関係を作ろうとした。一方、労働運動の指導者も、労働者に同情的な政治家G・H・エヴァンズ( George H. Evans )やホーレス・グリーリー( Horace Greeley )らと共に、労働者の利益と反奴隷制を結びつけようとした。彼らは、「土地の独占」が北部労働者の抱える問題の根源であると主張し、その解決策としてホームステッド案を提示した。ホームステッド案は「フリー・ソイル」と呼ばれるようになったが、これによって東部の労働者は西部の農場で経済的独立を達成することによって「賃金奴隷」から完全に逃れられるはずであった。しかし自由な自作農場は奴隷を擁するプランテーションと共存することが不可能であったため、この案が実現されるには、奴隷制の西部への拡大が阻止されねばならなかった。

1848年には奴隷制拡大に反対する政治家と労働運動の指導者とが連合して、初の実質的な第三政党である自由土地党( the Free Soil Party )を結成した。彼らは大統領候補にヴァン・ビューレン( Van Buren )を立て、一般投票の10%を獲得し、労働者組織からもかなりの支持を得た。自由土地党は政策の中心に奴隷制と自由な土地を置いて、奴隷制廃止論者と労働者の不和を除去し始めた。

1850年代になると、自由土地党の主張を通して奴隷制は北部で主要な問題となった。また、新たに支配的な政治勢力として出現した共和党によって、自由土地党の反奴隷制論は、南部と北部の労働者が置かれている状態の相違に最大の力点を移して展開されるようになった。奴隷制社会の南部とは異なり、労働者が土地を獲得し社会で上昇する機会を与えられている北部は、その社会的流動性によって労働の効率をも高め、経済的發展を享受していると彼らは主張したのである。

アブラハム・リンカンはまさに北部の社会的流動性を体現していたのであるが、彼ほど効果的に奴隷制拡大に対する反対を労働者の原理で説明した人物はいなかった。「全ての人間が自らの生活条件を改善する機会を持つことを私は望む。黒人もその機会を持つ権利があると信ずる。」と彼は述べ、一人が働きもう一人がその成果を享受する奴隷制は強盗と同じことであると主張した。これは労働運動の基本的な前提と一致するものだった。結局リンカンは黒人のために市場で競争する自由、つまり彼らの言う「人生のレース」に参加する権利を要求した。彼は黒人であれ白人であれ、勤勉に働けばだれでも経済的独立という大切な目標を達成することができると仮定したのである。

しかしながら 1850 年代に、北部の労働者が共和党を支持していたかという問題には答えることができない。と言うのは、彼らは北部社会の他の集団と同様に、民族、宗教、職業の線に沿って分裂していったからである。そのようななかで、共和党支持の中心は農村であった。また、都市の熟練労働者も共和党に結集していた。しかし奴隷制拡大の問題に関しては、北部の労働者は頑固に反対した。なぜなら、奴隷制が西部を支配するのを許してしまえば、彼ら自身も、彼らの子孫たちも、社会的に上昇する主要な道と思われるものを失ってしまうからであった。

### Ⅲ. 労働者の連邦への結集

以上のような経緯で、南軍がサムター要塞を攻撃した時には、実質的に北部社会の他の全ての構成分子と共に、労働者は連邦支持へと結集した。しかし、南北戦争は、北部の労働者にとって勝利と悲劇の両方を意味していた。奴隷制廃止はついに実現されたが、それは奴隷制廃止論者が主張したような道徳的説得によってではなく、戦争の危迫した状態と、奴隷状態から逃れようとした奴隷自身の努力の結果であった。連邦軍隊は、北部の農民と労働者によって充たされた。しかし北部の労働者は、戦争のやり方にしだいに怒り始めた。戦争中、工場主や公債商人は政府との契約で財を成した一方、インフレのため労働者の収入は相対的に減少した。さらに政府は折にふれて軍隊でストライキに干渉したが、これは労働者にとって戦争の努力を侵害するものと感じられた。また、1863年の徴兵法に至っては、労働者に強い反発を巻き起こし、それは反徴兵制暴動へと発展した。

南北戦争は、北部の産業を大きく発展させはしたが、その反面ギルディッド・エイジ鍍金時代における社会対立の基礎を作り出しもした。そして、新しい産業社会の成果を労働者に分配すべきだと主張する労働運動を復活させることになった。「賃金奴隷」という考えは、1850年代には影を潜めていたが、南北戦争の灰のなかから不死鳥のごとく甦り、全国労働連盟 ( the National Labor Union ) や労働騎士団 ( the Knights of Labor ) といった戦後結成された労働者組織の改革運動を鼓舞したのである。

#### 【コメント】

エリック・フォナーは、アメリカのマルクス主義歴史学を代表する研究者の一

人で、トマス・ペインの政治思想、アンテ・ベラムの政治思想と運動、そして最近では再建期の南部について著作を発表している<sup>(2)</sup>。本論文においても、北部の労働者と奴隷制廃止運動及び奴隷制拡大反対運動の関係を、フリーソイルイズムを軸に、労働者の置かれていた状況を踏まえながら明快に解説している。特に労働者、奴隷制擁護論者、奴隷制廃止論者、自由土地党、共和党といった、それぞれ立場の異なる利益集団の行動原理とでも言うべきものについて、簡潔で的確な説明がなされている。要約をしてみて、一つだけ気がついたことがあるので記しておきたい。

フォナーは、フリーソイルイズムが出現する以前、労働者が奴隷制廃止運動に対してとった態度は曖昧なもので、奴隷制廃止論者との関係は、時として非友好的であったと述べている。さらに、労働者のなかにあった人種差別に言及し、労働者側の限界によってその原因の一端を説明している。しかし、この時期の労働者が奴隷制廃止運動に果たした役割に対するフォナーの評価は、それらの説明がなされていてもなお全体的に見ると歯切れが悪い。この問題に関しては、より構造的な説明がなされるべきではないだろうか<sup>(3)</sup>。

確かに始まったばかりの労働運動は未熟であり、労働者も自分自身の解放と奴隷の解放との相関関係を、有機的に結びつけて理解してはいなかった。しかし、奴隷制廃止運動に携わった人々の構成は多様で、労働者に属する人々も多く含まれていた。それゆえ、この問題に対する評価を定める場合、やはり何と言っても奴隷制廃止運動の実際の基盤がどこにあったかということをはっきりさせなければならないだろう<sup>(4)</sup>。その上で、労働者の担った役割について、社会構造を意識した検討が加えられるべきではないだろうか。

## (註)

- (1) 全体を通して Antislavery は、語意を明瞭にするため「奴隷制拡大反対」と訳した。
- (2) フォナーについて、わが国で紹介されているものとして、戸澤健次氏の〔書評〕「Eric Foner, *Nothing But Freedom*」『アメリカ史評論』4(1985)がある。
- (3) わが国の研究者のものでは、西川進氏の「ジャクソニアン期の急進的アポリショニズムの社会的性格について — 特に Immediate Abolitionism

を中心に」『福岡教育大学紀要』（社会科編）24（1974）がある。

- (4) 最近の研究動向を紹介したものとして、福本保信氏の「奴隸制廃止運動 — 運動担い手の階級性」『アメリカ史研究』5（1982）がある。